

【第二弾】 神山威氏の講演内容の誤りについて (前編)

神山威氏は、二〇一四年六月十八日、韓国・釜山で開催されたUCI(別名・郭グループ)での集会において講演をし、その後韓国各地での講演会で、天(天)の国経典『天聖經』の批判、真のお母様に対する批判、および後継者問題などについて自説を語り、統一教会員の一体化を損ねる分裂行動をしました。神山氏はそれにとどまらず、日本でも同年九月二十一日に東京、同二十三日に名古屋、同二十六日に福岡で講演会を行い、同様の批判を繰り返し述べ、教会内部に混乱を引き起こさせる分裂行動を取っています。

既に【第一弾】「神山威氏の講演内容の誤りについて」(前編・後編)を掲載しましたが、今回は、東京での神山氏の講演および会場で配布された資料に基づき、その問題点を指摘いたします。なお、誌面の都合上、文字数の制限があるため、より詳しくは「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp/)」をごらんください。(教会成長研究院) 注・本文中、神山氏の講演内容は「茶色」で、真の父母様のみ言は「青色」で色分けしています。

(一)「天の父母様」の呼び名
は、真のお父様の思想と食い違
うのか？

神山氏は、二〇一三年天曆一月十三日(陽曆二月二十二日)の「基元節」を機に、神様(天

様と変えて祈るようにしなければならなかった、その動機は……？ 真のお父様が『天のお父様』と涙で祈禱されておられたので、そのままではよかったです。何故変える必要がありそうですか？…… 天のお父様と呼ぶほうが自然であり、もっと近くに感じます。 **神様を天の父母様と呼ぶ現在の組織に違和感を感じます。** 英語ではHeavenly Parents日本語に訳すと天の両親となります。天の父母様を英訳するとHeavenly ParentsかParents of Heavenとなります。二性性相の中和の主である神様を父と母に両親に分けてしまっています。この様な考え方がお父様が主張する思想でしょうか？」(神山氏の講演会「配布資料」)

様を父と母に両親に分けてしまっています。この様な考え方がお父様が主張する思想でしょうか？」と不信感を露わにして批判します。 しかし、この「天の父母様」の呼び名は、既に真のお父様が神様に対して用いられた呼び名です。

(一)「天の父母様」は、真のお父様が使われた呼び名、

真のお父様は、従来、神様を天のお父様と呼んでおられました。天の父母様と呼んでおられましたが、それ以外に「天の父母様」「天の父母」とも語っておられました。

上述のように、神山氏は「神様を天の父母様と呼ぶ現在の組織に違和感を感じます。……二性性相の中和の主である神山氏の講演会「配布資料」)

「六千年間も準備して訪ねてこられた神様がアメリカを離れたら、どこに行きますか。神様さえ正しくお迎えすれば、家庭問題、倫理問題、青少年問題、人種問題は自動的に解決されます。五色人種が一つに相ま

みえて生きていくアメリカは、地上天国のモデルなのです。 ……『長子の国』であるアメリカが先頭に立って、天の父母様に侍り、世界各国を神様の前に導く先導的な使命を完成すべき時です」(真の神様の祖国光復『三三二ページ』)

このみ言は、二〇〇〇年一月二十二日、米国ワシントンDCで、真のお父様が「終末における人類とアメリカが行く道」と題して語られたものです。

「墮落したという事実は、長男長女を追い出したということと連結されます。長男というのとはひとり子です。長女はひとり娘です。アダムとエバは、神様の億万代のひとり子、ひとり娘として生まれました。……億万代の子を失った神様がそれを再び取り戻すためには、億万代の苦痛を越えずしては取り戻す道がないのです。そ

のような天の父母がいたということを知りませんでした」(八大教材・教本『天聖經』一一二九ページ)

真のお父様は、ひとり子、ひとり娘を失った神様の心情を述べるときに「天の父母」の呼び名を用いておられます。

神山氏は、「二性性相の中和の主である神様を父と母に両親に分けてしまっています」と批判しますが、「天の父母」とは、真のお父様が唯一なる神様に対して用いられているのであって、一つは概念です。父と母に分離させ、二つに分けて語っておられるわけではありません。

神山氏は、『原理講論』に「神は性相的な男性格主体であられるので、我々は神を父と呼んで、その格位を表示するのである。……神は本性相と本形状の二性相の中和の主であると同時に、本性相の男性と本形状の女性との二性性相の中和の主と

性との二性性相の中和の主と

しておられ、被造世界に対しては、性相的な男性格主体としていまし給う」(四七ページ)と論じられているのに基づいて、「天のお父様と呼ぶほうが自然であり、もっと近くに感じます」と語ります。

また、神山氏は、真のお父様のみ言から次の一節を引用します。

「神秘的な境地に入って祈るとき……宇宙の中心は何かと尋ねれば父子の関係だという答えが得られます。宇宙の中心は何か？……父子の関係だということです。これを普通の人は自分自身で産んでくれた母親と父親のことだと思っています。……そうではありません。……神様と人間が父子関係の情を中心として一つになっている、その位置が宇宙の中心だという結論が出てくるのです」(注・神山氏側が『み言』にかなった子女指導』より抜粋して引用)

この「宇宙の中心は、父子関係」とあるという観点から見て、神山氏は神様を「天のお父様」と呼ぶほうが自然であると考えているようです。

ちなみに、ここで明確にしておかなければならないのは、父子関係とは「父と息子」の関係に限らず、「父と娘」の関係も父子関係であるという点です。確かに、私たちは、神様に對し「天のお父様」と呼んで祈ってきました。それは、神様が「被造世界に対しては、性相的な男性格主体」とあるという観点から見たとき、正しい呼び名です。

しかし、それでも神様は「本陽性(男性)」としてのみおられるのではなく、「本陰性(女性)」でもあられます。神様には、女性の性稟がないのではなく、あるという点を理解しておかなければなりません。

神山氏は、「天のお父様と呼ぶほうが自然」と言いますが、

真のお父様が直接、執筆された『原理原本』にも「天の父母」という言葉が登場します。

「神様の体として一つになつた一つの夫婦の出現成就の時の祝宴が、すなわち小羊の婚宴というものである。それゆえ、人間が根本父母を取り戻して侍る最初の出発日が、すなわち再臨成就の重要点になつてゐる。……今まで神様を父なる方として、母のいない父として歴史を通してきたことを人間は知らなければならぬ。母のいない父なる神様であつた……それゆえ天の父母の成立がなされてこそ、子女の家庭組織成就が始まることのできるということが目的であるので、聖徒や天の人間はこの一日を長く待ち望んできたのであつた」(『原理原本』第三編「復帰摂理」の第四章より。注・暫定訳)

この「神概念」の問題を考え

「神様が永存の父母の位を具体的に確定」すると語っておられるように、神様の願いは「天の父母様」になることでした。二〇一三年の基元節を機に、神様の呼び名が「天の父母様」になりましたが、それは、真の父母様が「最終一体」を成し遂げ、摂理の「完成、完結、完了」を宣布する勝利圏を立てておられたがゆえに可能だったので。真のお父様は、これまで、神様を「囹圄の神」「鼓子の神」と語っておられましたが、神様は解放され、さらには人類子女たちに対する真の父母としての責任を果たされることによって、ついに「天の父母様」となられたのです。また、真のお父様は、神様の血統の出発について次のように語っておられます。

「神様の体として一つになつた一つの夫婦の出現成就の時の祝宴が、すなわち小羊の婚宴というものである。それゆえ、人間が根本父母を取り戻して侍る最初の出発日が、すなわち再臨成就の重要点になつてゐる。……今まで神様を父なる方として、母のいない父として歴史を通してきたことを人間は知らなければならぬ。母のいない父なる神様であつた……それゆえ天の父母の成立がなされてこそ、子女の家庭組織成就が始まることのできるということが目的であるので、聖徒や天の人間はこの一日を長く待ち望んできたのであつた」(『原理原本』第三編「復帰摂理」の第四章より。注・暫定訳)

るとき、神様は「母のいない父なる神様」の立場から、どのように「天の父母の成立」をなし、いつから「天の父母様」と呼ばれるようになられるのでしょうか。それを理解するには「神の成長」という概念について知らなければなりません。

(2) 神様の願いは、「天の父母様」になることであつた

真のお父様は、人間の成長過程と人生の目標について次のように語っておられます。

この人間の成長が、神様とど

「幼児が成長したのちに結婚をするということ、これは、夫婦の位置を尋ね求めていくことであり、父母の位置を尋ね求めていくことです。神様と一体になる位置を尋ね求めていく道です」(八大教材・教本『天聖經』二二二二六ページ)

「アダムとエバが神様を中心とした真の愛の夫婦となれば、神様は理想どおり、ご自身の実体であるアダムの体の中にいましたまいながら、エバを愛されるようになるのです。さらには、アダムとエバは神様の実体をまとつた真の父母となつて、善なる愛、善なる生命、善なる血統の出発となつたことでしょう」(同、三一―三二ページ)

「四大心情圏と三大王権を完成した家庭が、理想的な家庭」(八大教材・教本『天聖經』二三四四―二三四五ページ)とあるように、三大王権(三代圏)の完成が理想家庭であるならば、それは、男女が結婚して夫婦となり、子女ができて父母となり、さらにその子女が結婚して孫が生まれ、祖父母となつて、その孫の結婚までを含め、真の家庭の「三代圏の完成」を指します。しかし、『原理講論』に「イ

う関係しているのかを理解しなければなりません。真のお父様は次のように語っておられます。

「人間創造とは、神様ご自身が成長してきたことを実際に再度展開させてきたものです」(同、一五九〇ページ)

「神様も赤ん坊のような時があり、兄弟のような時があり、夫婦のような時があり、父母のような時があつたので、(人間を)そのように創造されたのです」(同、一五九一ページ)

従来の神学では、神様を「永遠不変」の絶対者」としてのみ捉え、「神の成長」という概念を知りませんでした。しかし、「わたしと父とは一つ」(ヨハネ一〇・30)と語られたイエス様は、聖書を見れば分かるように、幼児期、少年期、青年期、成人期と成長していかれました。「神様と一体になる位置を尋

エスと聖霊とは、神を中心とする霊的な三位一体をつくることによつて、霊的眞の父母の使命を果たしただけで終つた」(二六八―二六九ページ)とあるように、イエス様は「個人路程」を歩まれましたが、結婚できなかったために、家庭路程を歩むことはできませんでした。

それゆえ、眞の父母様が歩まれた一九六〇年陰曆三月十六日の「聖婚式」から二〇一三年天曆一月十三日の「基元節」までの神様の摂理は、眞の父母様が「眞の父母」として成長し完成していかれる「家庭路程」ひいては「天宙的路程」であつたと捉えることができます。同時にそれは、神様が「天の父母様」になられる成長過程だと言へるのです。

「基元節」は、神様の結婚式を祝賀し、天一国を実体的に出発する起点となる日です(天一国経典『天聖經』一三七四―一三七五ページ)。したがって「基元節」を

ね求めていく道」が人生であるなら、神様とイエス様の願いは、さらに結婚をし、人類の「眞の父母」になることであつたと言わざるをえません。

真のお父様は、アダムとエバの結婚式は「神様の結婚式」でもあつたと語っておられます。

「横的な父母であるアダム・エバは神様の体であり、縦的な父母であられる神様が心なので。……ここで心と体が一つになつて愛するとき、アダム・エバの結婚式は「体的な父母の結婚式であると同時に、心的な神様の結婚式になるのです」(『ファミリー』一九九九年一月号、二二二―二二三ページ)

「アダムとエバが眞の愛で完成することは、まさに神様が実体を身にまとう願いが成就するのです。……アダムとエバが善なる子女をもつて眞の父母になることは、まさに神様が永存の

機に、神様を「天の父母様」と呼ぶようになったのは、神様が長い歴史において切望してこられた「父母」となるその願いがかなつたことを意味します。

「創造主は、眞の愛を中心とした心の父母であり、アダムとエバは、横的な体の父母なので、この二つが合わさつて天の父母と地の父母が一つとなり、天と人が合わさつて息子と娘が生まれたならば……そのまま神様の国へ行くのです」(八大教材・教本『天聖經』九一―九二ページ)

神山氏は、「神様を天の父母様と呼ぶせる今の組織に違和感を感じます」と批判しますが、これは「神様が永存の父母の位を実体的に確定」することを願ひ続けてこられたのを理解してないため生じた批判です。